

箱根駅伝 注目度の高さ 実感

学生記者

齋藤優衣 (総合政策2)



予選会取材を初体験

昭和記念公園の芝生広場に、赤い「C」の文字をデザインした白のジャージー姿の選手が横並びになった。どの顔つきも険しい。きょうの走りにあまり満足していない様子で、予選を突破できたのかという緊張感が痛いほど伝わってくる。予選会1位の大学名が呼ばれ、遠くのほうから歓声が響いてきた。順に2位、3位、4位と呼ばれていく中に、中央大学の名前はなし。

選手の表情はどんどん曇っていく。9位早稲田大学と発表されると、空気がさらにピンと張りつめた。残り1校。応援に駆け付けたOB、OGや大学関係者、一般のファンらを含め、かたずをのんで発表を待った。選手たちは目を閉じ、祈るような表情だ。

「第10位……中央大学」。たちまち歓声と拍手が沸き起こった。ほっとした表情の選手、よかつたと大きく息を吐いたり、顔を手で覆い涙をこらえたりする姿を間近で取材して、「なんてすばらしい瞬間に立ち会えたのだろう」と強く感じた。中央大学の名がアナウンスされたとき、私自身も鳥肌が立った。





季節外れの暖かさが選手を苦しめた＝10月26日

本戦出場決定に鳥肌、熱気に圧倒される

選手を祝福の聲が包み、温かい気持ちになった。心からよかったです。本戦へ向けた応援部のエールも一層、力強く感じられた。こうした取材現場を訪れたのは初めてで、選手の表情、観戦者の反応や雰囲気、スポーツの現場の熱気を体感できたことは貴重な経験となった。

本戦出場決定にほっとするだけでなく、選手の話聞いて回ると、皆が目標を持って、いかにチームに貢献するかをしっかりと考えていることがわかった。「当たり前前」「(走りの)基礎の部分を見直す」など、藤原正和監督と同じことを口にする選手もいた。チームに共通した意識が浸透していることに驚くとともに、ひとつのチームとして戦っていることに改めて気付いた。きっと、たくさんの紆余曲折を経て、まとまりのあ

るチームになったのだろう。

見守る人々の熱気も高まる一方だった。この日朝、フィニッシュ地点の昭和記念公園には、出場43校の選手、関係者だけでなく、在校生や母校を応援するため遠方から駆け付けた父母会の方々、叱咤激励すべく集まったOBらが詰め掛けていた。その数の多さにまず圧倒される。老若男女、これほどまで大勢の人がレースを楽しみにしている。箱根駅伝の注目度の高さを実感した。公園

内の大型スクリーンにテレビ中継の映像が流れ始めると、「がんばれー！」と声が飛ぶ。「ああ、始まったのだ」と私の胸も高鳴った。

報道各社と肩並べて取材、新鮮な体験

われらが中央大学陸上競技部長距離ブロック(駅伝)の選手たちは、季節外れの暖かさの中で、前半にペースを上げすぎたようだ。藤原監督もレース後、「スピード重視の練習をしてきたが、予想外の暑さにやられた」と振り返った。気温に適した臨機応変のペース配分の大切さを感じさせた。

お正月の予定は「箱根駅伝を見ること」というくらい、わが家は大きな箱根ファン。箱根駅伝の名門に入学したいと中大進学を決めたくらいなので、私自身の思い入れも強い。それでも、今までテレビ中継でしか見たことがなく、選手たちを遠い存在のように感じていたが、取材で言葉を交わすことでより身近に感じられ、応援したいという気持ちがいっそう強まった。

藤原監督に取材したときのこと



予選会のレース後、藤原正和監督(左)を取材する学生記者の齋藤優衣さん

も印象に残った。監督というと厳しい方なのかなと少し身構えて臨んだが、話を伺うと、選手のことを一番に思う優しい指導者の姿があった。物腰柔らかな監督の人柄が、チーム全体のよい雰囲気につながっているのだと感じた。人柄や対応の仕方などを知ることができたのも、

現場取材という形でじかに関われたからだ。

日本テレビをはじめ報道各社の記者と肩を並べて取材したのも今までにない経験で、とても新鮮だった。毎日、目にするニュースの現場はこうなっているんだと身をもって知った。

なにはともあれ、中大の本戦出場が決まった。2020東京五輪・パラリンピックイヤーの幕開けとともに、令和初となる箱根駅伝。私の中でお正月の一番の楽しみになった。中大関係者の皆さん、「ONE TEAM」で箱根駅伝をぜひ応援しましょう！



力走する舟津彰馬・駅伝主将(右から3人目)

本戦で「悔しさ」晴らせ！ ぎりぎり10位通過、 3年連続93回目出場

新春の第96回箱根駅伝の予選会が10月26日、立川市(陸上自衛隊立川駐屯地一園宮昭和記念公園、ハーフマラソン21.0975キロ)で行われ、中央大学は予選通過ぎりぎりの10位(10時間56分46秒)で3年連続93回目の本戦出場を決めた。11位の麗澤大学との差はわずか26秒だった。10月下旬としては高い気温に苦しみ、力を出し切れない選手が多かった。この悔しさを本番で晴らそうと、チームは一丸となって正月の箱根路に挑む。

第96回箱根駅伝出場校

●シード校 (前年上位10校)

東海大
青山学院大
東洋大
駒沢大
帝京大
法政大
国学院大
順天堂大
拓殖大
中央学院大

●予選会(10月26日)通過校

順位	大学名	記録(時間・分・秒)
①	東京国際大	10・47・29
②	神奈川大	10・50・55
③	日本体育大	10・51・09
④	明治大	10・51・42
⑤	創価大	10・51・43
⑥	筑波大	10・53・18
⑦	日本大	10・54・29
⑧	国土館大	10・55・21
⑨	早稲田大	10・55・26
⑩	中央大	10・56・46

関東学生連合(オープン参加)

●藤原正和・駅伝監督

「学生たちの実力を引き出してやれなかった。仕上がりがよかった分、非常に悔しい思いです。(本戦の目標の)シード権(10位以内)獲得は十分に可能性があると思っている。(予選会を突破できず、2017年本戦出場を逃すなど)つらい思いをしてきた4年生をいい形で送り出してやりたいという気持ちは変わらない。苦勞が報われてほしいというのが一番の思いです」

●田母神一喜・

長距離ブロック主将(法4)

「(予選会の結果で)今のままではだめだと全員が思ったはずで、チームを引き締めていきたい。本番を想定した練習が大事だと思う。本戦で必ずシード権を獲得し、古豪復活へののろしを上げたい」

●舟津彰馬・駅伝主将

(経済4)

「もう一度エースとして認めてもらうため、しっかり練習し、(本戦で)区間賞を狙いたい。チームとしては、シード権を全員で取りにいて、今年こそ笑顔で終わりたい。監督に指導していただいたことを発揮して、出し切った、やりきったと実感して終わりたい」

●池田勸汰選手(商3)

「(きょうの走りは)20点ぐらい…10点かもしれない。自分の中で何もかもうまくいかない部分があった。全く満足していない。当たり前前を当たり前前にやるというのを言われ続けてきたので、その見直しをして、プラスアルファが必要なら、それをやっていく。(本戦では)中大のエースは池田だなと誰が見ても思うような走りをしたい」

●畝拓夢選手(法3)

「夏にスピード重視の質の高い練習をやってきた。トラックレースでは結果が出せたが、ロードレースはごまかしが利かず、長い距離の練習をもっと入れていきたい。(本戦では)1年目の山(1年時5区を完走)をもう一回リベンジしたい。山の対策もしていく。自分がチームを救うような気持ちで、区間賞を取るような走りを心がけてやっていきたい」

●大森太楽選手(文3)

「力がついてきている実感はあるので、あとは安定感をどう上げていくかが課題。食事や睡眠など生活の当たり前の部分を突き詰めていく必要がある。(本戦では)目立たなくてもいいのでチームに貢献できるようにしたい」

●三須健乃介選手(文3)

「上半期はけがでチームに迷惑をかけた。集団走で残り5キロが勝負と思っていたが、後半の粘りが本戦への課題です。体を強く作り直したい」

●矢野郁人選手(商3)

「涼しければ1時間3分前半(実際は1時間5分45秒)とっていたので満足できていません。集団走(のペース)をもう少し落とし落としてもよかったかもしれない。本戦ではいい走りを見せ、しっかりとつなぎたい。油断なく臨みます」

●三浦拓朗選手(商2)

「(夏合宿で左足を負傷するアクシデントがあり)治って上向きな状態というコンディション的には、きょうは満足のいく結果でした。前は風邪をひいて(本戦を)走れなかったのが、今回は区間賞を取り順位を上げたい」

●森凧也選手(経済2)

「きょうの走りは70点くらい。どうにかラスト5キロを最低限に粘り切れた。きょうのような大きなレースでプレッシャーに打ち勝つことが課題の一つ。(本戦では)往路のエース区間で他大学のエースに勝つことを目標に頑張っていきたい。気持ちで負けないようにしたい」

●箱根駅伝予選会 中大・上位10選手●

全体順位	選手名・学年	記録(時間・分・秒)	全体順位	選手名・学年	記録(時間・分・秒)
15	森 凧也(2)	1・03・58	124	川崎新太郎(3)	1・06・02
25	畝 拓夢(3)	1・04・20	151	岩原 智昭(3)	1・06・24
35	三浦 拓朗(2)	1・04・37	178	大森 太楽(3)	1・06・48
51	池田 勸汰(3)	1・05・01	188	舟津 彰馬(4)	1・06・54
105	矢野 郁人(3)	1・05・45	192	三須健乃介(3)	1・06・57

沖縄で夏の合宿取材 学生が報告

FLP松田ゼミ

第1弾

「環境問題」「女性起業家の増加」

ジャーナリズムについて学んでいるFLP松田美佐ゼミの学生たちが今年の夏、恒例の合宿取材を沖縄で行いました。青い海に囲まれた自然豊かな沖縄で何を見て感じ、考えたのか。第1弾として沖縄の環境問題、女性起業家の増加について2人が報告します。

Report from
Okinawa

目立つ「起業家」女性の活躍 民間団体がサポート



丹野ひとみ
(商4)



ガールズスクエアで女性の相談を受け付ける能塚善之さん(左)



名護市でゲストハウス「ウムサン」を経営する岸本かおりさん

沖縄県は、2016年度に県内の全企業数に対して新規開業した企業数（開業率）が8%を占め、全国トップとなった（中小企業庁統計）。この比率は現在も全国平均を上回り、新規の経済活動に意欲的に取り組む姿勢が見てとれる。中でも活躍が目立つのは女性たちだ。同じ統計によると、2013年度の沖縄県の新規開業者の女性の割合は23.7%と、全国平均より7.7ポイントも高く、飲食・サービス業や生活関連サービス業で、沖縄ならではの特色を生かしながら地域を盛り上げようと奮闘している。女性が人脈をつくったり、一定のキャリアを積んだりするのがまだまだ易しいとはいえない日本で、女性を支援する取り組みの現場を歩いてみた。

起業の一步は「役立ちたいという意識」

那覇市を拠点に活動している民間団体「沖縄女性起業サポートネットワーク」事務局の能塚善之さんに話を伺った。能塚さんは、2012年に起業を志す女性を対象とした相談窓口を開設し、現在は、起業したい女性が集い、情報交換をする「ガールズスクエア」という場の提供と、起業を支援する「輝き女性塾」の運営などを行っている。

ガールズスクエア、輝き女性塾の活動の特徴は、他の女性たちともコミュニケーションを図りながら、将来成し遂げたいことを検討し、整理するという起業の準備段階の支援に特化している点。一般的な創業塾

と比べ、女性がこれまでの職業経験などを見つめ直し、「こんな人に、こんな方法で役に立ちたい」という意識を高めていくことを大事にしている。

能塚さんは「誰かのために役に立ちたいという気持ちがなければ起業する意味がない」と強調し、「自分がやらなければいけない理由を、これまでの経験から探していくことが大切でしょう」とも話した。

つまり、起業という道を選択し、実現させようとする第一歩は自分を深く見つめ直す「自分探し」にあるということだろう。これから社会に出て、誰かの役に立とうとする学生の私たちにとって、時間的にも気持ちの上でもそう遠くない話だと感じた。

“OG”が起業の悩み、 相談を受け付け

実際にガールズスクエアで起業仲間と出会い、輝き女性塾を受講した岸本かおりさんは2018年4月から、名護市でゲストハウス（宿泊施設）の「ウムサン」を運営している。沖縄出身で、高校卒業後に上京し、アパレル業界やPR業界で働いていた。このため沖縄では起業に関するつてや相談相手もなく、何をしようにもゼロからのスタートだった。役所や商工会議所などに相談しても目指す道は見えてこなかった。

途方に暮れかけたころ、新しい事業を始めたいという志を持ちつつ、和気あいあいとした雰囲気女性が集うガールズスクエアに参加した。「女性の立場で起業に対する悩みを話し合える場を見つけられた。大変さを感じているのは自分だけじゃないと実感できた」と振り返る。

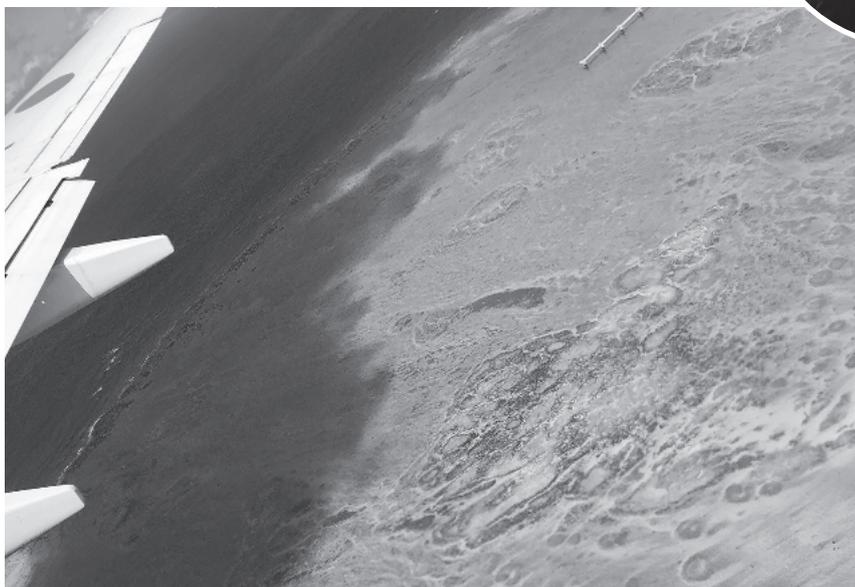
今では「女性起業サポーター」としてガールズスクエアに集まった女性の相談相手を務める。起業相談の専門家でなく、輝き女性塾を受講して実際に起業に成功した“OG”がサポートに回るという良い

循環が確立している。この好循環が、自分を見つめ直すきっかけを生み、起業への意識づけや継続する覚悟を強くすることにつながっているようだ。

沖縄で女性が起業した一例として岸本さんを紹介したが、女性の視点を持って起業し、町が魅力的になったり住みやすくなったりすることにつながれば、地域はより活性化するはずだ。沖縄では、起業しようとする女性自身だけでなく、女性の方で地域をよくしてほしいと、そのサポートに回る人たちが、“躍進”を後押ししていた。

Report from Okinawa

一人ひとりが守る環境 自然豊かな海に2つの異変



沖縄のサンゴ礁（那覇から石垣島に向かう飛行機内から撮影）



水谷遥香
(法3)

沖縄と聞いてすぐに思い浮かぶのが「美ら海」と呼ばれる青く透き通った海。ところが、自然豊かな美しい海に今、2つの「異変」が起きている。サンゴの骨格が透けて全体が白く見える「白化」と呼ばれる現象と、農地から海への赤土の流出だ。この2つの問題解決に向けて、海と陸地で取り組みが進められている。



赤土の流出を防ぐため農地に設けられたグリーンベルト＝石垣市内



サンゴ「白化」に 危機感

沖縄近海には数百種のサンゴが生息する。サンゴ礁の存在は生態系の多様性を担保し、観光資源であるだけでなく自然の“防波堤”の役割も果たしている。近年確認されるようになった白化の原因は、地球温暖化による海水温の上昇やサンゴを食べるオニヒトデの大量発生などさまざま。白化が続くと、栄養を摂取できずに最悪の場合は死滅する。

保全対策の1つは近年活発に行われている移植だ。保全にどの程度

寄与するかが完全に検証されているわけではないが、保全に関わったことのない人でも活動がイメージしやすく、何より「大切なサンゴ礁を未来に残そう」という意味で大きな普及・啓発効果が期待できる。

沖縄県も移植活動を始める手助けとなる「沖縄県サンゴ移植マニュアル」を作り、活動をサポートする。トラブル防止のため漁業関係者やダイバーに事前説明することなど、移植に必要な手続きや注意点をまとめたものだ。

県自然保護課の津波昭史さんによると、移植活動を始めたい人は、まずマニュアルで注意点などを学

び、最初は企業などですでに活動している人に協力してもらおう。やり方を覚えてから、自主的に進めていくという方法が主流だという。社会貢献として移植を推進する企業もある。村全体でサンゴを守るという意識が強く、2018年に「サンゴの村宣言」をした恩納村^{おんな}では1998年から漁協が移植を行っている。

県全域でも民間参加型事業として、各地域が主体となった保全活動が行われ、「それぞれの地域で保全活動を継続できる体制を作り、仕組みを普及していくことは、県が取り組むべき今後の課題」と津波さんは話す。

赤土流出を防ぐ 「グリーンベルト」

もう一つの「異変」である赤土の流出は、以前は開発に伴う陸地からの流出が大半だったが、現在は農地からの流出が問題となっている。台風などの豪雨で海まで流れ着く。海岸近くの畑だけでなく、離れた場所の畑からも川をつたって海へ流れ、海水を赤く変えてしまう。

海を赤くする景観の悪化だけでなく、赤土に覆われたサンゴが光合成できなくなり、死滅の原因ともなる。流出による農家の被害も大きい。土壌は作物の収穫量を左右するため、農家は肥料などにお金をかけて土づくりを行う。流出で農家も貴

重な財産を失ってしまうのだ。

石垣市は2015年に「石垣市赤土等流出防止営農対策地域協議会」を設置、対策に本腰を入れている。協議会メンバーである「農業環境コーディネーター」は、流出に悩まされる農家への支援や普及・啓発活動を行うが、対策の一つが、「グリーンベルト」の植栽だ。畑の周辺に植物を帯状に植え、土壌に含まれた雨水をろ過することで流出を防ぐ。

県全体で行われている対策で、石垣市では協議会設置以降、ベチベルというイネ科植物12万本以上がグリーンベルトとして植えられている。農業環境コーディネーターの喜久川拓己さんによると、管理すれば長年残るといい、農家の負担は少な

いという。

こうした石垣市の赤土流出防止事業は2019年度末でひとまず終了し、その後は未定。農業環境コーディネーターの池間大斗さんは「もし事業がなくなっても、各農家が継続できるような営農体系を確立することが課題」と指摘する。

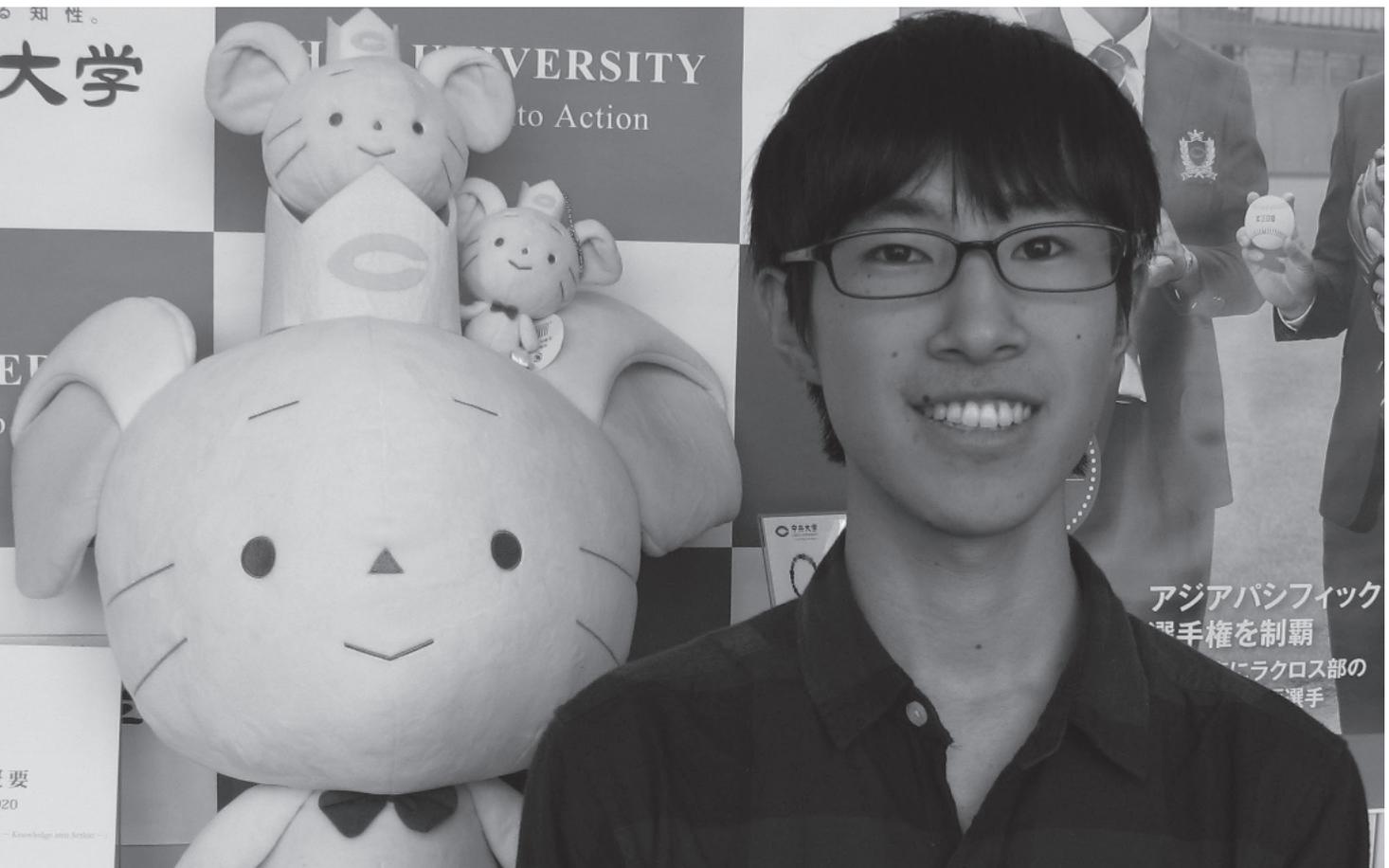
白化と赤土流出の対策で共通するのは、地域の人々が主体となって継続的に行うことを目指している点だ。移植マニュアルやグリーンベルトなど、行政側は対策の“土台”を作ったといえる。今後、地域の一人ひとりが環境対策にどう知恵を絞り、継続していくかが問われていると思う。

FLP 【Faculty-Linkage Program】

全学の「知」が結集した総合大学ならではの教育システム。各学部の授業科目をリンクさせ、新たな知的関心の領域に対応する教育の「場」を設定するプログラムとして、2003年度からスタートした。学部の枠を越えて新たな知的領域を系統的・体系的に学修し、学際的な視点から専門知識の修得と問題解決能力を高めることを目的としている。ジャーナリズムのほか、「環境・社会・ガバナンス」「国際協力」「スポーツ・健康科学」「地域・公共マネジメント」のプログラムがある。

「命救ってくれた」

送迎車を運転中、 意識失った運転手に救命措置



意識を失った運転手を救助した橋本千学さん

橋本千学さん(商1)に 福島の自動車教習所からお礼の手紙

乗っていた送迎車の運転手が突然、意識を失ってしまったら—。今年8月、自動車教習所の送迎車に揺られていた商学部1年の橋本千学^{せんがく}さんは、火急の事態に機敏に対応した。他の乗客と協力して心臓マッサージなどの救命措置を施し、運転手の50歳代の男性は一命を取り留め、けが人もなかった。送迎車は福島市の自動車教習所「マツキドライビングスクール福島飯坂校」のワゴン車(15人乗り)で、同校から「職員の命を救っていただいた。どうしても感謝の気持ちを伝えたい」と、お礼の気持ちをしたためた手紙が9月、橋本さんと大学に届いた。

感謝を伝えたい」

夏休みに免許取得、 入校2週間後の出来事

8月15日午後8時過ぎ、福島市御山の国道13号交差点で、右折レーンに停止していた送迎用ワゴン車の運転手の男性が意識を失い、車はひとりでにゅっくりと動きだした。夜でも国道の交通量は少なくはなかった。

「対向車は来ないだろうか」「信号機の色は?」。うなだれている運転手の姿を見て異変に気付いた橋本さんは、「ワゴン車が止まるまでは恐怖心しかありませんでした」と振り返る。福島市内に実家があり、夏休み中に運転免許を取ろうと、入校した7月31日から約2週間後に遭遇したアクシデントだった。

乗客は橋本さんと、他大学の学生や専門学校生ら男女計9人。ワゴン車は、アクセルから足が離れると自然に動きだすクリープ現象を起こし、十数メートル移動して、交差点の対角線上にある縁石に衝突して止

まった。

この後、9人は運転手の男性を車外に降ろし、それぞれが心臓マッサージをしたり、救急車など緊急車両の手配をしたり、近くの店舗にAED(自動体外式除細動器)がないかを探しにいたり、だれが言うでもなく自然に役割分担をして、迅速かつ的確に緊急事態に対応した。

「土地勘あり」 正確な場所を救急隊に伝える

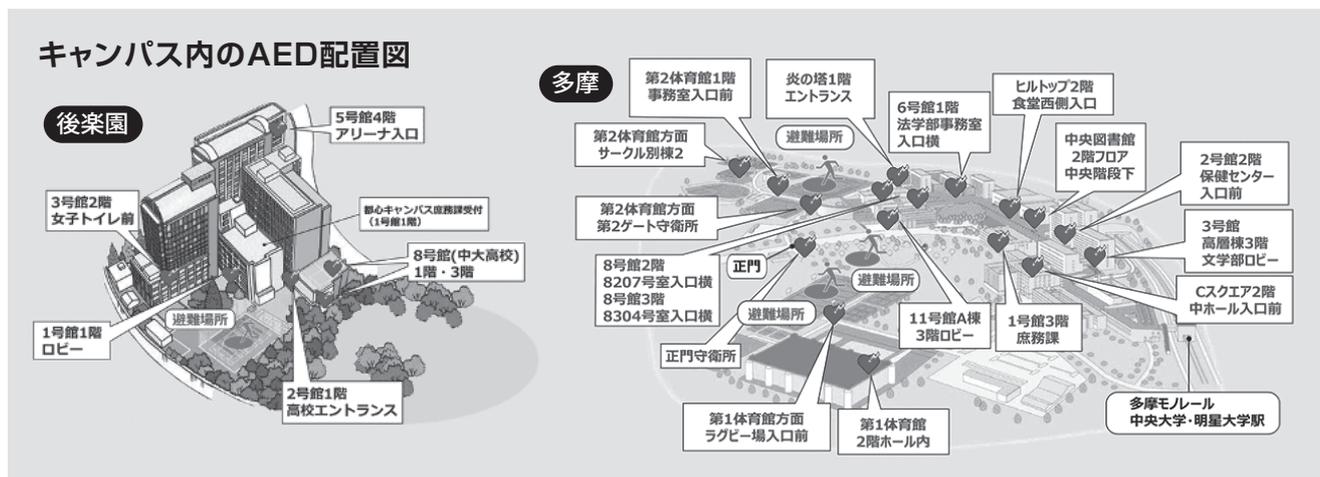
橋本さんは現地の正確な場所を救急隊や警察に伝えるという大事な役割を果たした。他の8人が合宿で運転免許取得に訪れた福島市外の人で、土地勘があるのは橋本さんだけだったからだ。緊急車両は5分ほどで現地に到着したという。

他の通行車両のドライバーも心配して車を降りて駆けつけ、ワゴン車を通行の妨げにならない場所に移動させてくれたりした。運転手の

男性は翌日、病院で意識を回復し、9月下旬に退院した。

今後、もし同じような事態に遭遇したらと尋ねると、橋本さんは「自分は率先して動けるとおもいます」ときっぱり。さらに「(入校から)ある程度教習が進んだ段階だったことも車や運転の知識という意味では幸いしました。ただ、あのときは頭が真っ白で無我夢中でした」とも話した。

同校からのお礼の手紙には「他の模範となる立派な行動で、職員の人命救助に当たってください、心より感謝とお礼を申し上げます」などとつづられていた。同校管理者の石井元司さんによると、他の8人にも同じようにお礼の手紙を送付した。石井さんは「橋本さんは(アクシデントの)翌日に、私のもとを訪ねて『きのうの方は大丈夫ですか』と気遣う言葉もかけてくれた。職員の命の恩人です」と、取材に対し改めて感謝の言葉を述べている。



万が一のときのため知っておきたい後楽園キャンパス、多摩キャンパスのAED設置場所

美術倶楽部50周年を 祝う会 OB、OGら70人が“再会”

松木綾乃(総合政策4)、大島幸(文3)、初貝鈴(商3)、
新井サキ(商3)

学芸連盟加盟の美術サークル「美術倶楽部CATS」の創設50周年を祝う会が9月21日、東京都新宿区のホテルローズガーデン新宿で開かれ、40～50代を中心としたOBとOG、現役生ら約70人が参加しました。本学でも歴史のあるサークルの一つで、来年に50周年を迎えます。このHAKUMON Chuoも表紙をめくると部員が若々しい感性で描いた絵画作品が毎号、彩りを添えています。現役部員の松木綾乃(総合政策4)、大島幸(文3)、初貝鈴(商3)、新井サキ(商3)が、CATSの歴史や祝う会の様子などを紹介します。



かけがえのない時間



CATS草創期のメンバーたち。1970年代の撮影と思われます



「CATS」の仲間とともに

CATSの由来は…

CATSは「Chuo Art Travel Society」の頭文字で、名前の由来は「猫」ではありません。創設者の笠間則雄さん（1973年卒）に初めてそれをうかがい、驚きました。1970年に神田駿河台校舎で誕生したCATSですが、合宿などの旅行を通して、仲間と絵を描く楽しさや親睦を深めるという「トラベル」の意味が込められていたと思われます。CASよりCATSの方が響きもいいと考えられたのかもしれません。

1～48期生の幅広い年代が参加

した祝う会は、「きょうは学生に戻って」の掛け声でスタートし、終始リラックスしたゆるい雰囲気CATSらしく印象的でした。思い出話や近況を語り合う輪が会場のあちこちに見られ、和やかにあっという間に時が流れていきました。

50年にわたり無償で絵を指導する絵画講師、高田学先生のもとには大勢のOB、OGがひっきりなしに笑顔で歩み寄り、懐かしそうに言葉を交わしていました。91歳の高田先生は約3年前までは頻りに多摩キャンパスを訪れ、絵の手ほどきを続けてください

ました。明るいオレンジ色の服を身につけた高田先生は「(教え子たちも歳を取り)顔を見ても知らない人ばかりだよ」と冗談っぽく笑っていました。

笠間さんをはじめ、各世代のOBのスピーチも印象に残りました。

「ヘルメットをかぶった学生がすぐ隣にいた大学紛争の時代だったが、日展などの公募展を目指していた」「『黄金の11期』と呼ばれた時代、公認部会になるためいろいろな活動に燃えていた」「バブル崩壊の頃は美術という存在自体が下火になり、存続の危機に陥った」

学生生活を彩る場で あり続けて

大学紛争？ バブル？ 全然知らない時代の話だけれど、いろいろな時代とともにCATSも盛り上がり、部員減で存続があやしくなったりしながら続いてきたということを実感できる貴重な機会になりました。OB、OGの皆さんとの関わりがほとんどなかった私たちは、そういった歴史があることすら知らなかった。

去年か一昨年、アトリエの片づけをしていて、ロッカーの奥でほこりをかぶった「1970年」と書かれた草創期のアルバムを見つけ、歴史のあるサークルなんだと驚きました。私たちが入部したころは、高田先生もあまり来られなくなっていたし、その歴史も忘れかけられていたように思います。

今回の祝う会でCATSは歴史の続きに立つことができた。最初は、関わったことのない人ばかりで、どうして自分がここにいるのだろうと

思ったけれど、話をするうちに「皆さん、CATSとともに学生時代を送った人たちなんだ」「かけがえのない時間をCATSで過ごしたんだ」と思って、不思議な気持ちになりました。

OB、OGの先輩たちは「今の時代は今の学生が主役だから」と帰り際に声をかけてくださいました。後輩たちが作っていくCATSも新しい時代とともに歩み、学生生活を彩る場であり続けることを願っています。

「高田先生の 長年の指導に感謝」

幹事役の11期生、村田裕さん

50周年を祝う会で幹事役を務め、開催に尽力したのは11期生の村田裕さん(1983年卒)。村田さんは、神田駿河台キャンパスで過ごしたOBを知る世代で、卒業後もCATSの活動に一定期間関わっていました。「入学してたまたま目に入った看板をみて何げなく入部しました。講師の高田学先生や先輩、同期と出会い、絵を通して学生生活が幸せで豊かなものになった」と自身の学生時代を回想し、祝う会の開催について「高田先生が指導を続けられた50年を機に卒業生に何とか連絡を取り、一堂に会する会を開きたかった」と話しています。

開催を思い立った村田さんですが、実は名簿や住所録が存在しなかったそうです。最初は38人分の名前を手がかりに徐々に情報を集めて、不完全ながらも380人の名簿が完成。往復はがきやメール、電話などで声をかけ、この日を迎えました。通常同窓会などと違って、初



会場笑顔を見せる高田学先生

対面の人々が多く集うことになり、本当に盛り上がるか心配したそうですが、当日の会場を見てそれも吹き飛んだといいます。

祝う会では、お世話になってきた歴代会長の挨拶や、各世代OBのスピーチ、プロジェクターによる現在のキャンパスや部室の紹介、高田先生への謝辞、花束贈呈とスムーズに進行し、最後に創設者の笠間則雄さんが挨拶しました。

村田さんは「長い年月、学生に無償で絵を教えてくださいださっていた高田先生の存在がどれほど貴重か。CATSを卒業したOB、OGの中に『きちんと感謝の気持ちを伝えたい』『もう一度会いたい』と思っている人も、きっといるのではないかと思うに至り、50周年が絶好の機会だと思いました」と感慨深そうに話していました。